

# まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第8号(平成25年11月15日)

読者数：448名(募集中)

メールアドレス：[hirosima.idea.c@urban.jp](mailto:hirosima.idea.c@urban.jp)

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

## □巻頭言

広島アンデルセンの旧館の思い出を語ろう

広島諸事・地域再生研究所主宰  
元広島大学教授 石丸紀興



## 今回の始まり

今回、10月6日付中国新聞から始まった。これによれば広島アンデルセン旧館の解体・新築か保存・改修かという事態に遭遇しているというのである。

よく知られているように、現在の広島アンデルセンは、元々は1925(大正14)年に建設された三井銀行広島支店の建物であり、被爆後改修されて現在のようなタカキベーカーリーのパン屋さん・広島アンデルセンになったので、いわゆる被爆建物なのである。三井銀行は日本の近代建築の礎を築いた建築家辰野金吾によって育てられた長野宇平治の設計である。建物の特徴等は省くが、広島の本通りに面して、銀行らしいファサード(立面)を備えて佇んでいたが、やがて戦時体制が進む中、帝国銀行に編成され被爆ということになる。その結果は、屋根も抜け落ち、コンクリート建築の骨格である柱梁といった基本的な構造体もずたずたになるほど破壊され、ある梁は垂れ下がり、ある柱はまともに立っていないのである。当時被爆の実相を伝えるためには原爆ドームか帝国銀行かを残すべきであるという主張まであったという。

途中を端折ってしまうが、それが現在の旧館のようになり、よくぞここまで生き延びてきたものだということになる。今後さらに生き延びていくためには、耐震性の確保といったことが避けられない事態となり、保存・改修ということになれば費用的、技術的に厳しいというのである。

ここでは解体か保存かを論ずるつもりはない。それが重要な問題ではないというのではなく、もう少し異なる観点からの取り組みを進めたいからである。それは広島アンデルセンが果たしてどのように、あるいはどの程度市民(広い意味での市民)の生活に馴染んできたか、アンデルセンの食文化はどう展開されてきたかを生活者の側から捉えて記録しておきたいのである。同時に建築の思い出も可能な範囲で言及していただく。そのため、アンデルセンの思い出を語ろうという企画が浮上している。そこで、まず第一歩として私自身からの思い出を語らせて頂き、次いで思い出を語って頂ける方を募集し、実際に語る会を実施するという枠組みを提示したい。

## 私のアンデルセンの思い出

このような個人的な思い出を語ることが巻頭言に馴染まないという指摘を受けるかもしれない



中国新聞(10月6日付)より転載



が、敢えてここからスタートしたい。私が広島に赴任したのが1966（昭和41）年4月のことで、いきなり膨大な都市調査に関わり、1年半近くがむしゃらに調査活動を進めたが、何というめぐりあわせか、改装されたばかりのアンデルセンの2階のギャラリーのようなところでデートをすることになった。といっても相手は2人の女性でたまたま知り合いの関係で食事でもしようということになったのかもしれない。その時のことはあまり詳しい記憶はないが、吹き抜けの2階のギャラリー（廊下を少し広くしたようなところ）で「えっ、こんなところで食事ができるの」と思ったのである。そこが被爆建物であるという意識もなく、ただ珍しい建物だなと思いながら食事をしたのが最初の出会いである。それから時々ワインとかチーズとか（パンも）を買い求めるお店としてお付き合いすることとなった。大学で11月頃、学生を連れて平和公園や本川小学校平和資料室を見学し、その帰りに元の日銀付近から本通りへ歩いてきて、ここでボージョレヌーボーなども買った思い出である。えびす講の頃は、この辺り最も華やいでいたと思う。



1985年、「広島被爆40年史／都市の復興」（広島市発行）の編集に携わり、そこから被爆建物への関心を高めて本格的な出会いとなった。アンデルセンはすでに幾度かの改修を経ていたが、その軌跡を辿りたいと資料収集をさせて頂いた。遂には当時の社長の高木ご夫妻とも面談の機会を頂き、特に高木彬子さんからは帝国銀行の建物であった当時の銀行建物を、建て替えないで、なぜベーカリー・レストランとして改修、再生させようとしたか、その熱い思いを聞かせて頂いた。特にミラノのガレリアの近くの「モッタ」というお店での印象を語って頂いた。それは「外観が古めかしくても内装は最新式でやっていける」、すなわち、多くの人々が馴染んできた外観、ファサードはそのままにしても、お店のスタイルは作っていけるというのである。外壁を構成するガラス沿いに陳列棚を設置することのアイデアも披露して頂いた。現在では珍しくないお客が各自でパンを選んで買い求めるスタイルの始まりであった。パーティーや会議・集会等を可能にする新館を旧館に合体するように建設し、そこでも旧館を活かす新たな展開となった。

なるほど、ヨーロッパの街も歴史的な景観を継承している場合は、このような考え方で維持されてきたということであろう。生活までも旧スタイルに縛り付けていては、継承は無理であろう。

このアンデルセンとの出会いが極めて印象的で、また設計者の方々とも出会い、いくつかの論文にも書かせて頂き、1996年の「被爆50周年ヒロシマの被爆建造物は語る」（被爆建造物調査研究会編、広島平和記念資料館発行）に収録している。

アンデルセンで開催されたデンマークフェアでは、学生たちにレゴモデル作成の機会を与えて頂いた。たくさんのレゴパーツを学生に与えたとき、最初は当惑していたが、その内次第に乗ってきて、巨大に繋がる一大模型を製作したこともあった。なにかよくわからないままのものまで展示させていただいたのである。

私の思い出の後半部分は、食文化的なものから離れてしまったが、アンデルセンと私との関わりの思い出なので書かせて頂いた。

### さあ、アンデルセン旧館の思い出を語ってください

そして「時代を語り建築を語る会」（主催：時代を語り建築を語る会実行委員会、代表石丸紀興）の第3回として「広島アンデルセンの思い出を語る会」を企画している。その詳細は本メールマガジン8号の末尾に掲載してあるので、関心のある方はご覧の上、参加をお願いしたい。

私としては、この旧館をうまい形で継承していく方法はないものか、検討を続けていく。アンデルセンとしては、いずれにしても旧館を2階建のまま維持したいと考えていると聞く。耐震性の確保のため、費用問題と技術的困難性を乗り越えて、広島の記憶の拠点、広島の誇り、名所としたいものである。





## ひろしまのまちづくりの動き

### ○中央公園エリアでフードフェスタ！

広島市中央公園内で10月26日（土）と27日（日）、ひろしまフードフェスティバルを始め、てっぱんグランプリやぺあせろべ、菊花展等のイベントが集中し、約81万人の人出で賑わった。フラワーフェスティバルが3日間で約180万人だから、エリアを勘案するとほぼ同じ混み具合である。

このフードフェスタに開催回数の冠が付いていないので、紐解いてみた。広島県が主体となって県内の農林水産物や特産品など食文化を一堂に集めた「第1回フードフェスタ広島」が1996年2月に広島グリーンアリーナで開催されている。その前身は1956年頃スタートした「農業祭」である。

一方、中国放送の開局35周年を記念して1987年に「広島城秋祭り」がスタートし、護国神社前広場にステージを組んでショーを見せたり、その周囲に「田舎を飲み食い語る会」のブースを出していた。

この「フードフェスタ広島」と「広島城秋祭り」が統合して、2005年から今の「ひろしまフードフェスタ」になった。今回で第9回目ということになる。行政サイドと民放がタッグを組むと強力である。年々内容が充実し、エリアも拡大している。

今年から旧市民球場跡地で第4回の広島てっぱんグランプリが開催。惜しいことに中央公園の芝生広場で行われた国際交流イベント「ぺあせろべ」は30回目の今年が最後となった。

今後益々市民に利用され、親しまれる中央公園であって欲しい。

（編集委員 瀧口信二）



フードフェスタ



てっぱんグランプリ



ぺあせろべ

### ○お知らせ：「ヒロシマと建築家」展開催

日本建築家協会中国支部広島地域会は「ヒロシマと建築家」の展覧会を下記の通り開催する。当協会はこの4月に公益法人として再スタートし、建築家の活動を広く市民に理解してもらうことを目指している。

特別展示として、建築家磯崎新氏の被爆地ヒロシマに触発された「ふたたび廃墟になったヒロシマ」と建築家故白井晟一氏の「原爆堂計画」の作品を展示。また、広島地域会のワーキンググループが検討した「広島市中央公園のランドデザイン—ひろしましみんひろば」の企画展示と中国支部会員による建築作品の展示がある。

- ・開催日時：2013年11月23日（土）～12月3日（火）、10～17時
- ・会場：旧日本銀行広島支店（広島市中区袋町5-21）
- ・招待講演：白井昱磨氏（白井晟一研究所代表）

テーマ「ヒロシマと建築家」：11月23日（土）、15～17時

- ・「ひろしましみんひろばを考える」ギャラリートーク：  
11月24日（日）及び30日（土）、14～16時

「ふたたび廃墟になったヒロシマ」は磯崎氏が1968年のデザイン展「ミラノ・トリエンナーレ」に出品した作品で、人類は二度と都市をヒロシマのような廃墟にはしないというメッセージが込められている。「原爆堂計画」は丸木夫妻の「原爆の図」を収める美術館として1954年に計画されたものであるが、折しも1953年のビキニ水爆実験の直後であり、核兵器の存在が建築の造形として問われた作品でもある。

「広島市中央公園のランドデザイン」はすでにこのメルマガでも紹介したが、ひろしましみんひろばを提案した旧広島市民球場跡地利用について市民と一緒に考えていく。

現在の建築家（支部会員）が取り組んでいる住まいづくり、街づくりも理想に向けた「復興」の延長線上にあり、建築作品や活動内容を展示して、建築家の思いを見る人に共有してもらう。



（編集委員 瀧口信二）

## ○広島市の復興の軌跡 (第3回)・・・河岸緑地の成り立ち

広島市の河岸は、特に戦後著しく変貌した。戦前の河岸、戦災直後の河岸、戦災復興事業による河岸、その後の整備による河岸と幾度もその姿を変えてきた。河岸緑地は広島に限られたものではない。最近多くの都市で見出すことが出来る。しかし、都市の中心部にかくも高密度に配された例は稀で、「広島市の都市計画の生命は河岸緑地である」とまで高く評価されている。

### 1. 戦前の河岸

戦災前の都心の河川は殆ど民家や料理屋が張り付いていた。市民は橋の上に行って初めて川が見られたという。

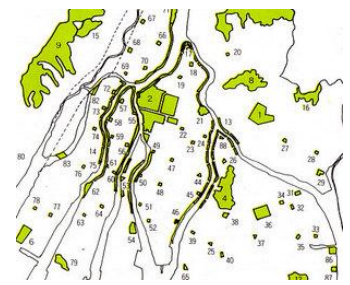
河岸の建物は決して低質なものではなかった。むしろ川の環境を取り入れ、生かそうとした恵まれた建物と云える。河岸から土台をはね出している建物も多く、川辺に縁や窓を備えている例も多い。川からの出入りのために、各家々に雁木が築造されていた。川では水遊びが盛んで、川と生活が密接に結びついていた事がうかがえる。



(昭和初期 京橋川)  
比治山下付近の河岸

### 2. 戦災復興と「河岸緑地思想」

河岸緑地の計画は戦後早くから提案され、復興審議会の審議過程で既に確定していた。河岸緑地が初めて法定計画として決定されるのは、昭和27年「平和記念都市建設計画」においてであった。河岸緑地の計画に込められている思想は、広島を“川のまち”として特徴づけ、河岸を開放し、併せて道路も沿わせようとする考え方であった。



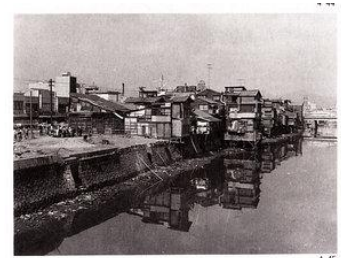
(昭和27年)  
公園・河岸緑地の計画図

#### <河岸緑地に関連した復興計画への主な提案>

- ◆「ベニスに水で栄えたが、広島は水で悩まされた。広島市の今後の発展に川は大きな問題。旧広島は川のすぐそばに道路があったが、あれはいけない。川べりは全て緑地帯として公園を造るべきだ」  
大田洋子 (作家)
- ◆「河岸は50~100mぐらいの空地として、河岸に遊歩道、公園などを設ける」  
竹重貞蔵 (県都市計画課長)
- ◆「道路を広々として、川べりを緑地帯にしたい。日本的な独創的な日本文化の最高度を発揮した近代都市に広島を創ってもらいたい」  
福井芳郎 (画家)

### 3. 不法建築の強制撤去

被爆によって中心部の河岸の建物は、全て破壊・焼失した。戦後は一転して、そこが河岸緑地として計画されたため、移転しなければならなくなった。土地所有者の権利は継承されるので、土地区画整理によって河岸以外の場所に換地が指定された。しかし、その指定に従わずに居残った場合、権利地主が移転した後に権利のない人が不法に建築して居住・営業した場合など、河岸が正当な権利のない状態になった。そこが不法建築・不法占拠と呼ばれる地区になったのである。



(昭和41年 猿猴川)  
建物の一部を強制撤去

河岸整備は長く放置されていたが、土地区画整理も大詰めに近づき不法建築が焦点となってきた。戦災復興を終わらせるためには河岸整備が不可欠になったのである。昭和41年1月、広島市は初めての的場地区の不法建築の強制撤去に着手し、河岸整備が大きく動き始めた。

### 4. 河岸緑地整備の進展と高潮対策計画

昭和40年代には、中心部の河岸の大半が整備され、現在見られるような河岸緑地の骨格が造られた。その後、国・県による河川の高潮対策計画の具体化にあわせて昭和55年、河岸緑地計画の全体的な見直しがされた。(猿猴川、京橋川の河岸緑地の拡大・延長など)



この計画をもとに平成 30 年代後半の完成を目指し、親水性の高い護岸や緑豊かな緑道の整備が進められている。(整備率約 50%)

緑道の整備はクスノキなどの常緑高木を主体に、川ごとにその河川を象徴する花木を植栽することを基本としている。

河川名	川を特徴づける花木
天満川	ナンキンハゼ、ハクモク
本川	キョウチクトウ
元安川	サクラ(ソメイヨシノ)
京橋川	ハナミズキ
猿猴川	オオシマザクラ

## 5. 「水の都ひろしま」の実現に向けて

近年、既に整備された水辺や河岸緑地などを市民が積極的に活用し、川や海を市民に身近なものにすることが大変重要になってきた。

ソフト面の充実を図るため平成 15 年、市民・民間等からのアイデアを募り「水の都ひろしま」構想が策定された。「水辺のコンサート」「オープンカフェ」「水質浄化実験」等さまざまな社会実験が行われている。

市民が都市のど真ん中で安心して水遊びが出来る、世界に類のない“川のまち”を取り戻すことを究極の目標にしたい。

(編集委員 高東博視)

※「広島被爆 40 年史・都市の復興」「広島新史・都市文化編」を主に参考にした。



(昭和 30 年頃 元安川) 原爆ドーム付近で水遊びする子ども達

## ○アイデアコンペの中から提案!

当面、2011 年に行った広島市中央公園アイデアコンペの提案作品の中からこのエリアを考えるうえで参考になる提案、アイデア等を紹介していく。

### ・作品番号 46 (タイトル「今、何もつくらない、という選択肢は?」)

今「何もつくらない」という選択肢はありえるのでしょうか。この問いかけは挑戦的であった。理想の姿を求めるアイデアコンペに対するアンチテーゼとしての強烈なメッセージとも言える。

今必要なのは現状の公園をもっと「使いこなす」方策を考えることであり、みんなが使いこなせるようになってはじめて公園の未来像が共有できる。

具体的な姿は被爆 100 年に向けて更なる議論が必要で、みんなが愛情をもって関わることができる公園にしていかなければいけない。

今すぐ誰かが結論を出すのではなく、時間をかけ、段階を踏んで、みんな考えていこうというプロセスの大事さを訴えている。受賞は逃したが、貴重な提案であり、一考に値する。



### \*提案者: 松本成久氏 (設計事務所) のコメント\*

里山を散歩しながら、今歩いている道の成り立ちについて考えることがあります。この道はなぜここに存在するのか? 山だったところを必要に応じて木を切り、地面を踏み固め、歩きやすいように整え、丁度よい場所に休憩場が出来て等々。パブリックの原点はこの辺りにあるのではないのでしょうか。みんなの場所をつくるには時間がかかりそうです。先につくってしまうと、簡単に必要性を追い超してしまうかもしれません。今「何もつくらない」ということはネガティブな姿勢なのではなく、一步一步前に進みながら本当に必要なのは何かを考えるということなのです。

## ○紹介 まちづくり関連の団体とその動き

### ・中央公園冒険広場もとまち自遊ひろばの紹介

子供が健やかに成長し、自主性や創造性を身につけていくうえで、遊びは大切な要素である。広島市こども未来局が主催する「もとまち自遊ひろば」は「子供の発想と創造力で自由に遊べるひろば」をモットーに運営されている。

原則第2・4週の日曜日に中央公園芝生広場の西側の一角で開催されているので、10月27日に訪れてみた。

当日はフードフェスタ他、イベントにより中央公園界隈は人で溢れる中、子どもたち77名が参加し、いつも通り穏やかな楽しい雰囲気になっていた。

遊び場に置いてあるロープ、シート、タイヤ、段ボールなどの材料と金槌、のこぎり等の道具を使って、自分たちで工夫しながら遊んでいる。もちろん世話をするサポーター「ゆうえん隊」や保護者が見守っている。

木の間にロープを渡して作ったブランコやハンモックで遊んだり、タイヤを使ってロープを滑っていた。親子で木工事に熱中しているグループもいる。新規参加者は親子で遊んでいるが、常連の子供たちがうまくリードしてグループ遊びに発展するという。

スタートして3年ほどしか経っておらず、このひろばの存在はまだあまり知られていない。「ここで実績を積み、サポーターを養成して、各地に展開できるようにしたい」とは石丸氏（セトラひろしま）の談。遠くから来ている人も多く、身近な場所に欲しいという要望も強いようだ。

今ある児童公園は規制が多くて子供たちが自由に遊べない。地域のサポーターが見守る中では、もっと自由に遊ばせてもよいのではないか。子供は遊びの天才である。このもとまち自遊ひろばが市民に認知され、輪が広がっていくことを期待する。



もとまち自遊ひろば



(編集委員 瀧口信二)

▼ホームページ：<http://boukenasobiba.blog.fc2.com/>

### ○私たちの遊び場づくりの活動

受付では初めて来た親へ、「手出し口出しせず大らかに見守りを。」と伝える。たいていの子どもは、ぱあっと表情が変わる(ニヤツとする子も)。「多少のケガはします。でも、成長の糧となります。」と理解を得る。そして、「行ってらっしゃい！」と子どもたちを送り出すと、心が解放されたかのようにひろばへ駆け出し、遊びへ溶け込んでいく。ここで見せる子どもたちの表情は、“本来の子どもたちの姿”を大きな説得力をもって大人たちに訴えかけてくれる。私たちの遊び場づくりの活動は、そういう活動である。失われつつある遊びの三間(時間、場所、仲間)を子どもたちへ取り戻し、大人たちへその大切さを伝えていくこと。子どもが子どもらしくいられる場所を、多くの大人たちとともに創りだしていきたい。

(遊援隊 六百田裕子)

## □ほっとコーナー

## 『恥ずかしい平和大通り』

グラフィックデザイナー 川原信子

平和大通り。四季折々に 150 種類の樹木が見る者を癒してくれています。

ある日、車で通った時に目を疑いました。この光景は？ アノ、イルミネーションのセットがまだ 10 月の半ばというのに、むき出しのシルバーの骨組みに赤いカラーコーンが置かれ、それにロープが張られ、憩いの通りが工事現場と化していました。

グリーンベルトに目立たないといけない役目をもつ赤のカラーコーンの点在は見にくくて仕方ありません。

10 月 25 日前後だと思うのですが、何と大きな白い雪の結晶が鎮座しているのではないですか。それにあのピンクの花の造り物が今年も早々とセットされています。丁度、白神神社の秋の大祭が行われている時期にイルミネーションとの抱き合わせに我慢できず、市役所の環境政策の担当者に抗議の電話をかけました。

このように直接電話を掛けたのは、後にも先にも初めてのこと。広島市民としてあまりに恥ずかしかったので……。

返ってきた答えです。「140 万個の電球をつけるのに時間を要するので……」(11 月 17 日から始まるイルミネーションの時期も大いに疑問を持っているのですが。)しかし大きなセットのモノでも 2~3 日で完了しています。どのように解釈すればいいかわかりませんでした。挙句の果ては「今や旅行会社とタイアップして年末の目玉商品として定着している。それに広島はほかの都市圏に比べて観光客は多い……」その答えの背景には、このような事例があるから観光客が増えている……そんな回答をいただきました。

反論することも力が抜けてしまい、これが現状と思うと、ふと思い出した言葉があります。先日お亡くなりになられた広告批評で有名な天野祐吉さんが 20 数年前に広島で講演された時に「広島は全国でも文化度の低い下から 2 番目」というコトバです。今やよくぞ言ってくださった。正におっしゃる通り。あれからもっと悪くなっているかもしれません。広島への欧米人の観光客の比率が日本一で、中でもフランス人が多いと聞いています。アノ、シャンデリゼ通りの美しく統一されたイルミネーション。神戸のルミナリエは鎮魂がテーマですよ。平和大通で繰り広げるのであれば 1 点集中型の圧倒する大きなモニュメントを設置。東西の通りに向けたタテのラインを強調させたものでパラパラ点在さすのはやめて、向かう先は平和公園。明日へつなぐイルミネーションとして。そして色も統一。

観光都市 HIROSHIMA とうたうのであれば、もっともっと質の高い HIROSHIMA ブランドを構築すべきと密かに願う一人です。ほっとコーナーにベリーホットなおハナシをさせていただきました。それでは、まずおいしい紅茶をいれて気分を沈めて……仕事モードにチェンジすることにします。





## ○アンケート調査の結果！

メルマガ「まちづくりひろしま」発行1年を期してアンケート調査を行った。回答いただいた方には感謝したい。ただ回答数が12と少ないので、統計的な分析は省略し、声なき声を聞きながら主な傾向・意見等を整理し考察する。

### 設問1、どの程度読まれているか？

・ほとんど読んでいない（1）・拾い読み程度（3）・全部目を通して（7）

\*回答者は関心の強い人が多いが、一般的には熱心な読者は少数派で、大半の方は拾い読みかほとんど目を通していないと推察する。

身近な問題には興味を示すが、広島のみまちづくり全般となると腰が引けてしまうか。まちづくりはまだマニアックな分野のようだ。

### 設問2、これまで興味を持った記事は？（複数回答可）

・巻頭言（5）・広島のみまちづくりの動き（8）・広島の復興の軌跡（5）・アイデアコンペからの提案（6）・まちづくり関連団体の紹介（2）・ほっとコーナー（0）

\*回答数は少ないが、読者の平均的な傾向が表れていると思う。

### 設問3、今後、取り上げてほしいテーマは？（複数回答可）

・広島市内の中央公園以外のプロジェクトの動き（8）  
・まちづくりに関わっている人の紹介（4）  
・まちづくりに寄与している建築や外部空間の紹介（6）  
・まちづくりに寄与している文化等のイベントの紹介（5）

\*広島には中央公園以外にも広島駅周辺、広大跡地、空港跡地等、まちづくりに関連するプロジェクトが動いている。外部空間的にも基町クレドやアリスガーデン等、成功事例がある。また町を賑やかすイベントや祭りも目白押しだ。うまくいった要因等を引き出しながら紹介していければよい。

### 設問4、広島（広い意味で）のみまちづくりに関心があるか？

・極めて強い（2）・強い（9）・どちらともいえない（0）・あまりない（0）

\*回答者だから関心が強い人が多いが、どちらでもない人が多数派ではないかと予想する。

### 設問5、現在、広島で推進されているまちづくりに対するスタンスは？

・理解できるので、バックアップしたい（3）  
・問題があるので、その方向を正していきたい（0）  
・市に働きかけても、がちが明かないので、あきらめている（0）  
・関心はあるが、静観している（5）  
・あまり関心がないので、興味がない（0）  
・その他（3）

\*関心はあるが、静観している人が多いのではないかと。何をしたらよいのか、一歩前に踏み出せない。まちづくりの情報も市民にうまく伝達できていないし、環境も整っていない。その溝を埋めるというこのメルマガの役割が見えてきた。

### 設問6、その他、気づいた点

・筆者の名前、プロフィール、写真を付けてほしい。  
・個別のみまちづくりが動いたときの要因を紹介するとよい。  
・もっと生活者の視点から見たまちづくりを紹介してほしい。  
・将来を見通した広島のトータルのみまちづくりビジョンをみんなで考えていくべき。

\*巻頭言に顔写真を、記事にもできるだけ執筆者名を付ける。編集委員リストを添付する。また、有識者に原稿を依頼するだけでなく、現場取材にも力点を置く。

\*このメルマガも一般の人にはまだ関心が薄いことが分かった。興味が持てる話題をいかに提供できるか。今回のアンケートは大変参考になった。これからの紙面に期待したい。  
(編集委員 瀧口信二)



## ○お知らせ：「アンデルセンの思い出を語る会」開催

現在、保存か解体か問題となっている広島アンデルセン旧館について、ひとまず保存か否かは横に置いて、ひとつの建物にどのような思いが宿るかという観点から語る会を下記の通り開催する。今までの広島アンデルセンに様々な思い出、記憶のある方から話を聞き、記録に残して、広島の戦後の建築、食文化、人々の暮らしの一断面として歴史的資料とする。

- ・開催日時：2013年12月21日（土）14:00～16:00
- ・会場：広島アンデルセン新館5階、プライベートダイニングルーム  
（広島市中区本通7-1、082-247-2403）
- ・会費：2000円（会場費とソフトドリンク、オードブル付）、中高生以下は1000円
- ・参加者定員：20名
- ・参加希望者は下記の連絡先に電話・FAX・メールで申込む。
- ・連絡先：広島諸事・地域再生研究所  
電話/FAX：082-223-7226  
メールアドレス：[nisimar5@hotmail.com](mailto:nisimar5@hotmail.com)
- ・傍聴希望者も準備のため事前連絡を条件とする。
- ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表石丸紀興）
- ・後援：広島アイデアコンペ実行委員会

## □あともがき

ポール・マッカートニー（71歳）が11月9日に来日し、11日の大阪を皮切りに福岡、東京で計6回の公演を行う。10月には新作アルバム「NEW」を発表し、ヒットチャートを賑わしている。ご存じのとおり元ビートルズのメンバーでポップス界の大御所だ。それにも関わらず、今回のプロモーションのためにライブを行ったり、テレビ番組に出演したり、新人デビュー並みの力の入れようだった。

私は11年前の東京ドームの公演で感動したが、70歳を過ぎた今なおパフォーマンスは健在である。ポールのパワーに多くのファンが希望と勇気をもらっている。私もその一人だ。このメルマガも反響は今一つだが、陰で応援してくれている人も多い。アンケートの回答が少なくて落ち込んだが、ポールのパワーにあやかって、これからも勇気をもって取組んでいきたい。  
（編集委員 瀧口信二）

## \*ひろしまのまちづくりについて

**皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

### 編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次	ひろしまコミュニティカレッジ代表